

rowing power of thinking 国語バージョン

成長する思考力

読解力特化



【このテキストの特色】

このテキストは、一般的な問題集のように、問題を解いて、できたかできなかったかを判断するだけのテキストとは違います。一言でいえば国語の読解力と表現力の訓練をする教材で、社会に出たときに必要となる力、他人の意見や考えを自力で理解し、取り入れる力、自分の考えをわかりやすく文章で表現する力をつけることを目的としています。

【このテキストの構成】

このテキストの最も特徴的なことは、同じ文章に二度ふれるということです。「トライ1」～「トライ3」で短めの文章を読み、最後にそれらの文章をまとめた長い文章をもとに「文章の読解・要約演習」を行います。

●「トライ1」～「トライ3」

文章を読解しやすくするため、文章を短く区切っています。漢字問題、文法・語句問題、読解問題を取り入れていますので、問題に取り組みながら、集中して文章を読むことができます。

●「文章の読解・要約演習」

このテキストの中心になる部分です。「トライ1」から「トライ3」までの演習で、ある程度、文章の流れ、文意をつかんだうえで、三つの文章をまとめた長めの文章をもとにして、本格的な読解と要約演習を行います。長い読解・要約問題については、その読解文・要約文をまとめやすいように、簡単な問題をいくつか答えした後、自分で答えたその解答をもとに作文するというステップ方式をとっています。

【取り組み方】

「トライ1」～「トライ3」の問題には、確実な答えがありますが、「文章の読解・要約演習」の問題については、定まった答えはありません。大切なことは、正答かそうでないかではなく、自分の考えを自分の言葉で書こうと努力することです。慣れないうちは、わかりづらい文章を書いてしまうこともあると思いますが、国語の基礎訓練だという意識をもって、十分な量を書くことができるように努めてください。このテキストを使い、「読むこと」「書くこと」に対する苦手意識をなくしてくれることを希望しています。

※ ルビに関しては、原文に示しているルビだけつけています。読めない漢字に関しては、辞書で調べて下さい。調べることによって、言葉の表現力が上がります。

〈目次〉

第一回	物語文①	1
	トライ1	1
	トライ2	2
	トライ3	2
	文章の読解・要約演習	3
第二回	物語文②	7
	トライ1	7
	トライ2	8
	トライ3	9
	文章の読解・要約演習	10
第三回	物語文③	13
	トライ1	13
	トライ2	14
	トライ3	15
	文章の読解・要約演習	16
第四回	説明文①	19
	トライ1	19
	トライ2	20
	トライ3	21
	文章の読解・要約演習	22
第五回	説明文②	25
	トライ1	25
	トライ2	26
	トライ3	27
	文章の読解・要約演習	28
第六回	説明文③	31
	トライ1	31
	トライ2	32
	トライ3	33
	文章の読解・要約演習	34

読解力特化 第一回 物語文①

トライ1 次の文章を読んで、それぞれの問いに答えなさい。

あけぼの家政婦①シヨウカイ組合から、私が初めて博士の元へ派遣されたのは、一九九二年の三月だった。瀬戸内海に面した小さな町のその組合に登録された家政婦の中で私は一番②ワカかったが、キャリアは既に十年を越えていた。その間どんなタイプの③雇い主ともうまくやってきたし、家事のプロとしての誇りも持っていた。他の皆が敬遠する面倒な顧客を押し付けられても、組合長に不平など漏らしはしなかった。

博士の場合、顧客カードを見ただけで、④手強い相手だと予測できた。先方からのクレームにより家政婦が交替した場合、カードの裏にブルーのインクで星印の判が押されるのだが、博士のカードには九つものマークがついていたからだ。かつて私が関わったうちで、最高記録だった。

面接のため博士の家を⑤オトズれると、応対に出てきたのは、上品な身なりの痩せた老婦人だった。栗色に染めた髪を⑥結び上げ、ニットのワンピースを着て、左手に黒い杖を突いていた。

「世話をしてほしいのは、ギテイです」
彼女は言った。最初、博士と老婦人がどういう関係なのか分からなかった。

「どなたも長続きしなくて、私もギテイも大変困っております。新しい方が来られるたび、また A 一からやり直して、手間ばかり掛かります」

ギテイとは義理の弟のことを言っているのだと、 B 私は理解した。

(小川洋子「博士の愛した数式」より)

1 ①、⑥のカタカナは漢字に直し、漢字はその読みがなをひらがなで答えなさい。

① () ② () ③ ()
④ () ⑤ () ⑥ ()

2 A、B にあてはまる語として正しいものを、次のア、イから一つ選び、記号で答えなさい。

ア ① ② ③ ④ ⑤ ⑥
イ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫

A () B ()

3 この文章の内容について、次の質問に答えなさい。

(1) 「私」はどのような人物ですか。次の I、II、III にあてはまる言葉を答えなさい。

I としての誇りを持って働き、II を押し付けられても決して不平を言わない、III を職とする女性。

(2) 「博士」が手強い相手だと予測できた理由はどのようなことですか。

次の I、II、III にあてはまる言葉を答えなさい。

顧客からの I により家政婦が交替した場合、顧客カードの裏に青いインクで II が押されるが、博士のカードにはこれまで「私」が見た中で III となる九つのマークがついていたこと。

(3) 「私」が面接で会った人物はどのような人物でしたか。次の I、II にあてはまる言葉を答えなさい。

ニットのワンピースを着た I の痩せた老婦人で博士の II にあたる人物。

(1) I () II () III ()
(2) I () II () III ()
(3) I () II ()

トライ2 次の文章を読んで、それぞれの問いに答えなさい。

「特別にややこしいお仕事をお願いしているわけではありません。月曜から金曜まで、午前十一時に来て、義弟にお昼を食べさせ、部屋の中を①セイケツに整え、買物をし、晩ご飯を作って夜の七時に帰る。たった、それだけです」

彼女の口から発せられるギテイという言葉には、**A** ためらうような響きがあった。②丁重な物腰にもかかわらず、左手だけは落ち着きなく杖をいじっていた。時折、私と視線が合わないよう注意しながら、警戒心に満ちた目でこちらを見やっつた。

「細かい取り決めは組合に提出している③ケイヤク書にあるとおりです。とにかく義弟に、誰もがやっている、ごく当たり前の日常生活を送らせてやる方ならば、私には **B** 不足もございません」

「弟さんは今、どちらに？」

私は尋ねた。老婦人は杖の先で、裏庭の先にある離れを指した。きれいに刈り込まれたレッドロビンの生け垣の向こう、生い茂った緑の④隙間から、小豆色のスレート屋根が覗いていた。

「離れと母屋おむやを行き来はしないで下さい。あなたのお仕事場は、あくまで義弟宅です。北側の道路に面した、離れ⑤センヨウの玄関がありますから、そちらを使って出入りしていただければ⑥ケツコウかと思えます。義弟が起こしたトラブルは離れの中で解決して下さい。よろしいですね。それだけは守っていただきます」

老婦人は杖を一度、コツンと鳴らした。

1 ①、⑥のカタカナは漢字に直し、漢字はその読みがなをひらがなで答えなさい。

- | | | | |
|---|-----|---|-----|
| ① | () | ② | () |
| ④ | () | ⑤ | () |
| | () | ⑥ | () |

2 **A**、**B** にあてはまる語として正しいものを、次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア さつぱり イ どこか ウ 割と エ ほんの オ 何の

A () B ()

3 この文章において、老婦人は「私」にどのような仕事をして、どのようなことを守ってほしいと依頼していますか。次の **I**、**II**、**III** にあてはまる言葉を答えなさい。

平日の午前十一時から夜の七時の間、義弟にごく当たり前の **I** を送らせてほしいが、離れと母屋は **II** はせず、義弟が起こした **III** は離れの中で解決すること。

I () **II** () **III** ()

トライ3 次の文章を読んで、それぞれの問いに答えなさい。

「弟さんに、お目にかかれますか？」

「必要ありません」

あまりにも **A** 否定されたせいで、取り返し①のつかない **シツ** **ゲン**をしたような気分になった。

「今日あなたと顔を合わせても、明日になれば忘れてしまいます。ですから、必要ないのです」

「と、おっしゃいますと……」

「つまり、②端的に申せば、記憶が不自由なのです。惚ぼけているのではありません。全体として脳細胞は③ケンゼンに働いているのですが、ただ、今から十七年ほど前、ごく一部に故障が生じて、物事を記憶する能力が失われた、という次第です。交通事故に遭って、頭を打つたのです。義弟の記憶の④蓄積は、一九七五年で終わっており、それ以降、新たな記憶を積み重ねようとしても、すぐに⑤崩れてしま

ます。三十年前に自分が見つけた定理は覚えていても、昨日食べた夕食のメニューは覚えておりません。⑥カンケツに申せば、頭の中に八十分のビデオテープが一本しかセットできない状態です。そこに重ね録りしてゆくと、以前の記憶はどんどん消えてゆきます。義弟の記憶は八十分しかもちません。きつちり、一時間と二十分です」

もう何度も同じ説明を繰り返してきたからだろう。老婦人は何の感情も込めずに B 喋った。

八十分の記憶について具体的なイメージを持つのは難しかった。もちろん病人の世話をしたことは何度もあったが、そうした経験がどんな役に立つのか、見当がつかなかった。今更ながら、カードにずらずらと並ぶブルーの星印が思い出された。

1 ①⑥のカタカナは漢字に直し、漢字はその読みがなをひらがなで答えなさい。

- ① () (2) () (3) ()
④ () (5) () (6) () ()

2 A、B にあてはまる語として正しいものを、次のア、オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア ぼんやりと イ 淀みなく ウ きつぱりと エ さつぱりと
オ つかえながら

- A () B () ()

3 この文章に書かれている博士がかかえる問題はどのようなものですか。次の I、III にあてはまる言葉を答えなさい。

交通事故に遭って、頭を打つたことが原因で、I を積み重ねることができなくなった状態である。それを例えて言うなら、頭の中に八十

分の II を一本しかセットできない状態で、そこに重ね録りしている III はほとんど消えていくという問題。

- I () II () III ()

文章の読解・要約演習

【あけぼの家政婦紹介組合から、私が初めて博士の元へ派遣されたのは、一九九二年の三月だった。瀬戸内海に面した小さな町のその組合に登録された家政婦の中で私は一番若かったが、キャリアは既に十年を越えていた。その間どんなタイプの雇い主ともうまくやってきたし、仕事のプロとしての誇りも持っていた。他の皆が敬遠する面倒な顧客を押し付けられても、組合長に不平など漏らしはしなかった。

博士の場合、顧客カードを見ただけで、A 手強い相手だと予測できた。先方からのクレームにより家政婦が交替した場合、カードの裏にブルーのインクで星印の判が押されるのだが、博士のカードには九つものマークがついていたからだ。かつて私が関わったうちで、最高記録だった。】

面接のため博士の家を訪れると、応対に出てきたのは、上品な身なりの痩せた老婦人だった。栗色に染めた髪を結び上げ、ニットのワンピースを着て、左手に黒い杖を突いていた。

「世話をしてほしいのは、ギテイです」

彼女は言った。B 最初、博士と老婦人がどういう関係なのか分からなかった。

「どなたも長続きしなくて、私もギテイも大変困っております。新しい方が来られるたび、またすべて一からやり直して、手間ばかり掛かります」

ギテイとは義理の弟のことを言っているのだと、ようやく私は理解した。

C 特別にややこしいお仕事をお願いしているわけではありません。月曜から金曜まで、午前十一時に来て、義弟にお昼を食わせ、部屋の中を清潔に整え、買物をし、晩ご飯を作って夜の七時に帰る。たった、それだけです」

彼女の口から発せられるギテイという言葉には、どこかためらうような響きがあった。丁重な物腰にもかかわらず、左手だけは落ち着きなく杖をいじっていた。時折、私と視線が合わないよう注意しながら、警戒心に満ちた目でこちらを見やつた。

「細かい取り決めは組合に提出している契約書にあるとおりです。とにかく義弟に、誰もがやっている、ごく当たり前の日常生活を送らせてやれる方ならば、私には何の不足もございません」

「弟さんは今、どちらに？」

私は尋ねた。老婦人は杖の先で、裏庭の先にある離れを指した。きれいに刈り込まれたレッドロビンの生け垣の向こう、生い茂った緑の隙間から、小豆色のスレート屋根が覗いていた。

「離れと母屋を行き来はしないで下さい。あなたのお仕事場は、あくまで義弟宅です。北側の道路に面した、離れ専用の玄関がありますから、そちらを使って出入りしていただければ結構かと思えます。義弟が起こしたトラブルは離れの中で解決して下さい。よろしいですね。それだけは守っていただきます」

老婦人は杖を一度、コツンと鳴らした。

(中略)

「弟さんに、お目にかかれますか？」

「必要ありません」

あまりにもきつぱりと否定されたせいで、取り返しのつかない失言をしたような気分になった。

「今日あなたと顔を合わせても、明日になれば忘れてしまいます。ですから、必要ないのです」

「と、おっしゃいますと……」

「つまり、端的に申せば、記憶が不自由なのです。惚けているのではありません。全体として脳細胞は健全に働いているのですが、ただ、今から十七年ほど前、ごく一部に故障が生じて、物事を記憶する能力が失われた、

という次第です。交通事故に遭って、頭を打ったのです。義弟の記憶の蓄積は、一九七五年で終わっております。それ以降、新たな記憶を積み重ねようとしても、すぐに崩れてしまいます。三十年前に自分が見つけた定理は覚えていても、昨日食べた夕食のメニューは覚えておりません。簡潔に申せば、頭の中に八十分のビデオテープが一本しかセットできない状態です。そこに重ね録りしてゆくと、以前の記憶はどんどん消えてゆきます。義弟の記憶は八十分しかもちません。きつちり、一時間と二十分です」

もう何度も同じ説明を繰り返してきたからだろう。老婦人は何の感情も込めずに淀みなく喋った。

八十分の記憶について具体的なイメージを持つのは難しかった。もちろん病人の世話をしたことは何度もあったが、そうした経験がどんな役に立つのか、見当がつかなかった。今更ながら、カードにずらずらと並ぶブルーの星印が思い出された。

(小川洋子「博士の愛した数式」より。文章を一部省略しています。)

課題1

文章中の【 】で囲まれた部分は、主人公である「私」が博士と出会うこととなるきっかけを示しています。【 】で囲まれた部分の要旨を、次のようなステップをふんでまとめなさい。

《ステップ1》

次の各質問に答えなさい。

- ① 「私」の仕事は何ですか。 ()
- ② 「私」は仕事に対してどのような思いを持っていますか。 ()
- ③ 「私」が博士の元へ行ったのはなぜですか。 ()

読解力特化 第二回 物語文②

トライ1 次の文章を読んで、それぞれの問いに答えなさい。

立派な母屋に比べ、離れは①シツソを通り越して見すばらしかった。素っ気ないコンパクトな平屋造りで、止むを得ず A そこに建っているかのような気配を②漂わせていた。その気配を覆い隠すためか、離れの周囲だけ、手入れをされていない③ジユモクが伸び放題に茂っていた。玄関は日当たりが悪く、呼び鈴は壊れて鳴らなかつた。

「君の靴のサイズはいくつかね」

新しい家政婦だと告げた私に博士が一番に尋ねたのは、名前ではなく靴のサイズだつた。一言の挨拶も、お辞儀もなかつた。どんな場合であれ、雇い主に対し質問に質問で答えてはならないという家政婦の鉄則を守り、私は問われたとおりのことを答えた。

「24です」

「ほお、実に④潔い数字だ。4の階乗だ」

博士は腕組みをし、目を閉じた。しばらく⑤チンモクが続いた。

「カイジヨウとは何でしょうか」

何故かは知らないが雇い主にとって靴のサイズが意味深いものであるなら、もう少しそれを話題に登らせておくべきではと考え、私は質問した。

「1から4までの自然数を全部掛け合わせると24になる」

目を閉じたまま博士は答えた。

「君の電話番号は何番かね」

「576の1455です」

「5761455だつて？ 素晴らしいじゃないか。1億までの間に

⑥ソンザイする素数の個数に等しいとは」

B 感心したふうに、博士はうなずいた。

(小川洋子「博士の愛した数式」より。)

1 ①、⑥のカタカナは漢字に直し、漢字はその読みがなをひらがなで答えなさい。

① () ② () ③ ()
④ () ⑤ () ⑥ ()

2 A、B にあてはまる語として正しいものを、次のア、エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア めきめき イ いかにも ウ 全然 エ さらに 才 洪々
A () B ()

3 この文章の内容について、次の質問に答えなさい。

(1) 博士が暮らす離れはどんな様子でしたか。次の I、II、III にあてはまる言葉を答えなさい。

素っ気ないコンパクトな I で、周囲には手入れをされていないジユモクが II に茂り、玄関は日当たりが悪く、III は壊れて鳴らないというように、シツソを通り越して見すばらしかつた。

(2) 博士は、新しい家政婦である「私」にどのような応対をしましたか。次の I、II、III にあてはまる言葉を答えなさい。

一言の挨拶も、I もせず、突然、「私」の II を尋ねて、その答えに対して、潔い数字だという感想を述べた。次に「私」の電話番号を尋ねて、その数字が、1億までの間にソンザイする III の個数に等しいことに感心した。

(1) I () II () III ()
(2) I () II () III ()